

木野通信 KINO PRESS

KINO PRESS Issue 63 | 京都精華大学広報誌

木野通信

京都精華大学
NOV. 2014 Issue 63



巻頭 教員インタビュー

研究者・堤邦彦に聞く
怪談から探る、私たちの「内なる異文化」。

63
号

特集 01 FEATURES 01

- 04 巻頭 教員インタビュー
研究者・堤邦彦に聞く 怪談から探る、私たちの「内なる異文化」。

特集 02 FEATURES 02

- 10 佐藤守弘×安田昌弘 越境する京都カルチャー

大学ニュース NEWS

- 14 養老孟司氏と内田樹氏が人文学部客員教授に就任決定
京都精華大学 創立45周年記念事業「ダイ・ラマ 14世×よしもとばなな講演会」での対談を収録した「小さいじわるを消すだけで」が出版
学長の竹宮恵子が2014年度秋の褒章で「紫綬褒章」を受章 ほか

連載企画 REGULARS

- 20 在学生による授業紹介 第3回 芸術学部映像コース「メディアアート5B」— 町家を使った映像インスタレーション展—
教員によるレポート グローバルなアニメーション教育とは何か? — 第15回広島国際アニメーションフェスティバルに参加して—
- 22 イベント紹介 「京都の伝統美術工芸」講座
デザイン学部建築学科・連続レクチャーシリーズ 可能性の空間
アセンブリーアワー講演会 森 栄喜「親密な、写真」
渋谷慶一郎 + evala「音楽に未来はあるか?」
石川九楊連続「公開」講座 第6講「“花”の構造」— 花と日本人
オープンキャンパス

海をわたる視点

学長 竹宮恵子

(マンガ学部ストーリーマンガコース教員/マンガ家)



みなさんは海外へ旅行されたことはありますか? 私の初海外旅行は、マンガ家としてデビューしてまもない21歳の頃、萩尾望都さんや山岸涼子さんらと4人で行ったヨーロッパ旅行です。旧ソ連のハバロフスクから飛行機で大陸を横断し、モスクワから鉄道でスウェーデン、ベルギー、オランダ、フランス、オーストリアなど計9カ国を1か月以上かけて回りました。

日本と西欧で文化が違うことは頭でわかっているけど、実際に異文化に遭遇するのは初めての経験。多くのショックを受けました。たとえば、寝台列車に食堂車がなくて空腹に耐えかねていた時、ある家族が一箱のビスケットを恵んでくださったのですが、日本人的な感覚で半分を返したら無礼に当たり、怪訝な顔をされたり。湿気のないヨーロッパの秋が想像以上に寒かったり。今ではインターネットで世界中の情報を容易に得ることができますが、多くは知っているつもりになっているだけ。コンピュータの窓から見えないものに触れた時、自分の視野を大きく広げてくれるものが世界にはたくさんあることに気づきます。

一方、日本にいたがらの身近な経験が、意外にもグローバルな体験を導いてくれたこともあります。たとえば、『風と木の詩』を読んでもらった韓国の方が「少年マンガみたい」と感想を寄せてくれたことがあるのです。実際は少女マンガに分類されるのですが、作者の私自身が少年マンガのようだと思っている節もあり、その感覚が国境を越えても共通であることに驚きました。またある時、西洋の本に掲載されていた建物の写真をアレンジして住居を描いたら、教え子の留学生から「私にはこの建物が住居ではなく寺院に見える」と、思いもよらぬ指摘を受けたことも。外国の方の目を通して、自分でも気づいていなかった作品の本質に気づかされたのです。

“海をわたる視点”は、外国へ出たり、包括的な視野をもつだけではないのです。国内にも多くの視点があり、また対象に深く向き合うことでも獲得されると、私自身、日々の中で学んでいます。

研究者・堤邦彦に聞く 怪談から探る、 私たちの「内なる異文化」。

text by KIN Toyo, photographs by ISHIMOTO Masato

2015年に大きな変革を試みる、京都精華大学人文学部。

新たに掲げた教育方針は、世界に向けて開かれた“グローバル人材”の育成だ。ビジネスの現場や多くの大学で叫ばれて久しいこの言葉だが、人文学部では“グローバルである”ということは、「海外で働く」ことや「英語を流暢に話す」などのスキルを指すのではなく、自分の足元をしっかりと見つめ、身近な“異文化”を理解することからはじまると考えている。ともすれば世間の“グローバル”に対する理解とは正反対であるが、そこにどんな考えがあるのか。

精華が根を下ろす京都に目を向ければ、神社仏閣をはじめ、多くの歴史遺産に囲まれていることがわかる。そしてそこには古くから伝わる説話伝承も数多く存在する。それらを対象に長年にわたってフィールドワークや文献調査を重ねてきた研究者・堤邦彦によれば「“身近な異文化”とは、私たちのなかに潜んでいる」というのだ。

人文学部が目指す“グローバル人材”の育成とは。その真意を探るべく、堤とともに説話伝承の地を巡りながら話を聞いた。

育った土地の記憶、先祖たちの記憶が知らぬ間に私たちの心に棲みついているといってもいいでしょう。ところが、それらの来し方行く末を説明しようにも、普段から気にかけていないため、なかなか言葉にならない。グローバル化の掛け声にあふれる昨今、『お前は何者か』の問いに答えるには、まず、「内なる異文化」を直視することが必要です」。

たとえば堤が精力を傾けて研究してきた「女人蛇体」をモチーフとした物語のなかでも、代表的な「安珍・清姫の伝説」。熊野詣に訪れた若い僧侶・安珍に一目惚れした清姫は、恋の炎を燃やし、再び会う約束をするものの安珍は現れない。恋しさで怒りのあまり大蛇となった清姫は、道成寺の鐘の中に逃げた安珍に火を噴き、焼き殺してしまおうという恐ろしい話だ。このように、女性の怨恨や愛欲が蛇となり男を取り殺すという話は日本の怪談や説話によく見られる題材だという。なぜこのようなストーリーが生まれ、流行したのか。堤はその起源と変遷を探ることで、現代の私たちに通じる感情や文化の背景を明らかにしていく。

堤の専門は説話伝承史。なかでも妖怪や怪談といった、日本古来の魑魅魍魎の世界と文学の関わりを研究対象としている。本人いわく、「世の中の役に立たない（と見なされてきた）怪談研究がライフワーク」。しかし、妖怪という架空のモンスターや怪談というフィクションが歴史を通して脈々と語り継がれてきた背景には、何かしら世の中になくならない理由があったからに違いない。怪談話が怖いのは、そこに普段明るみには出てこない人間の欲望や感情が渦巻いているからだ。語られるストーリーは人間の本性を鋭く突いた、否定したい真実ばかり。だからこそ、人々は時代を超えて、恐いもの見たさに怪談話に惹きつけられてきた。堤は、そのような自分自身のなかにありながらも把握しきれない未知なるものを「内なる異文化」と表現する。

堤はこう語る。「異文化というのは欧米やアジア・アフリカ諸国といった『外国』だけに存在するものではありません。ふつうに生活している『自分』のなかにも、静けく確かな『異文化』が潜んでいて、時として疼いたり蠢いたりするのは、生まれ



大切なのは、余計なもの

——今日は堤さんとともに安珍・清姫の鐘が眠る妙満寺（岩倉）や通称・蛇道心寺といわれる摂取院（大原）を巡り、「女人蛇体」の起源や様式化について教えて頂きながら、「内なる異文化」について考えてみたいと思います。堤さんはフィールドワークはよくなるのでしょうか。

日本全国の寺社仏閣を調べたり、東南アジアの国々など海外へ行くこともあります。ただ、フィールドを足でまわるのはもちろんですが、同時に記録された文献を調べることも大切です。さすがに500年前の現場には出ることはできませんからね。また、妖怪や怪談は時代によって話が変わるので、その当時の人間観、宗教、民俗、政治状況といったさまざまな局面が影響するということを理解しながらでない、一面的な研究で終わってしまいます。だからこそフィールドワークと文献研究という両輪が必要です。どちらかに偏ってしまうと違う方向に行ってしまうかもしれませんから。

——今はインターネットでデータ化された膨大な情報がすぐに手に入りますが、アナログな手

法で情報収集するメリットは何でしょう。

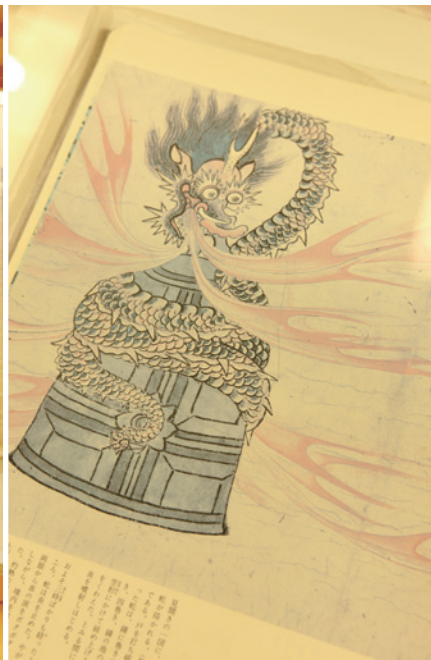
今やインターネットで何でも調べられますからね。インターネットによって必要な情報にピンポイントにアクセスできるけれど、周辺を見ないでしょう。デジタルソースのデメリットは、視界が狭くなってしまうがちなこと。本来、文献を調べていると余計なページをめくったりして寄り道をしたりしますが、そんな時にふと全体が見えることがあるのです。戦場カメラマンが「現場に行かないからわからない」というのと同じで、研究のレベルでもそういうところがありますね。データベースでは出会えない、余計なもの、が、とつてもおもしろいんです。

——堤さんご自身も、フィールドワークで大きな発見をされたことはありませんか。

これから行く摂取院は35年前に文献を辿って見つけました。「因果物語」という江戸時代に流行した本がありまして、そのなかに「女人蛇体」の典型の話があります。西陣のある男が、奥さんと奥さんの妹と3人で住んでいたんだけど、ちょっとやばい関係に



写真右は清姫が蛇身に変身し、鐘の中にいる安珍を焼き殺す場面を描いたもの（土佐光重画「道成寺縁起絵巻」）。写真左は岩倉・妙満寺に奉納された道成寺のものと同様の鐘。



なっちゃう。奥さんはそれを嘆いて死に、後に蛇になって男の腰にまといつき、どうやっても離れなくなってしまう。ところが、

女人禁制の高野山に逃げると、入り口で蛇は入れなくて離れるんです。それで3年修行して、さすがにもう大丈夫だと思っ出てくると、またしても蛇がくっついてしまう。結局、京都で偉いお坊さんに念仏を唱えてもらって、やっと蛇が落ちるわけです。男は僧になって浄往と名を変え、「これから念仏の力を信じて生きます」といって、大原に籠って庵を結んだと伝えていきます。この話をめぐって京都の名所記や仏書、古文獻をあれこれ探してみたら摂取院に辿り着きました。「蛇道心の図」という寺宝の掛け軸や蛇がまとった僧侶の像を見つけた時は興奮しましたね。

「女人蛇体」は仏教寺院が意図的に生み出したもの

——そもそもどうして、蛇々になるのでしょうか。

本来、蛇は川や水を象徴する水神だったのですが、ある時代から急激に歪んだ恋愛の内面を表現する材料に使われるようになります。その背景には、中世から江戸期にかけて民衆生活のすみずみに浸透した仏教寺院の、きわめて意図的な女人成佛思想の布教や恋愛を「業」とみなす考え方が見え隠れします。

たとえば江戸の戯作者・為永春水の草双紙に、妻と妾の髪の毛が蛇になる描写があります（『新局九尾伝』）。普段仲良くしている女たちの髪が、眠っている間に心に宿った嫉妬の念をあたりにあらわし、蛇となって互いに争う。なんともグロテスクな図像です。実はこうした説話の源流としては、一遍上人の出家にまつる蛇髪の女たちの物語が知られていました。しかも明らかに説教の場の寓話に用いられていたのです。

江戸期の寺院では、女性を前にして「安珍・清姫」や「因果物語」を題材にした説教がしばしば行われていました。19世紀初めの江戸・回向院に関する記録を見ると、「清姫の角」なる珍宝が並べられて、人々の目を驚かせた話が出てきます。蛇

体の女は角まで生えていたのでしょうか（笑）。これに限らず蛇女が残した鱗だとか、骨だとか、この類いの宝物を伝える寺は全国的に珍しくありません。こうした珍宝を物語の証拠として開帳することで、人を集めたりもしていました。布教のために宗教のイベント化・芸能化が起こるんですね。宗教活動が芸能へ、そして怪談文芸へ……。そのようなプロセスを通して蛇体の女の執念が日本文学のモチーフのひとつに姿を変えていくわけで、僕はそんなことを調べているだけで30年も経ってしまいました（笑）。非常に奥が深い世界です。

——平安・江戸を経て、女人蛇体のストーリーは現代にどのよう

に引き継がれているのでしょうか。

江戸時代から培われたストーリーは明治に引き継がれ、現代怪談に繋がっています。今もテレビドラマなんかで表面的に仲良くしている女性が裏でやりあうような表現がたくさんありますよね。そのルーツは創作意識の高まった16、17世紀の戯作文芸にあるわけです。怪談は江戸時代の人々の強烈な人間意識が創り出したもの。人の内面の通常触れない暗黒をわざわざ

写真右は大原・摂取院の開基浄往を模した像で「蛇道心の図」をもとにつくられたと思われる。写真左は人文学部堤邦彦研究室が保有する為永春水の戯作『新局九尾伝』。二人の女性の髪の毛が蛇に変化している。



ほじくり返していくってというのは、どんな時代でも読む者・読者の心をとらえるんですね。それを一つひとつ解明していくということは、自分のなかに脈々とあるけれどなんとなく言語化できていない、そんなものに光を当てることにも繋がります。それが私のいう「内なる異文化」なんです。

グローバル化が進む現代、内なる異文化を直視することが必要

——堤さんは、世間の「グローバル化」をどのように感じていますか。

どこの大学でも企業でもグローバル化、グローバルイズムっていうけども、それがなんの目的でどんな理念で行われるかをしっかりと議論するべきですよ。たとえばユニクロなんかは英語で話したり海外に拠点をつくりたりしていて、ある意味グローバル化の極です。そういった経済的な金儲けを目的としたグローバル化は目的が単純明快でわかりやすい。別にユニクロのことを批判しているわけじゃないですよ。今日、僕は全身ユニクロだし(笑)。

学の日本民俗学の先生が、妖怪をどう英訳するかを研究したんだけど、マンガ「ぬらりひよんの孫」(椎橋寛/集英社)をどう訳すかで大いに悩み、結局、妖怪を翻訳するのは無理だ、という結論に至るのです。『Japanese monster』にしてしまうと「ジラミたいなイメージで何か違うし。それで結局この人の著書は『The Book of YOKAI』になりました。でも、妖怪をなんとか訳そうと試行錯誤する過程って、とてもグローバル的ですよ。ものすごい知識の積み重ねのもとでいろんな葛藤をして、それで最終的に訳さないという選択をすることに意味があるわけですよ。その地域や国をきちんと異文化理解したからこそ、訳せないということが身を以て理解できる。日本人の我々でも、ぬらりひよんとか天狗倒しなんてちゃんと理解していないでしょう。そこがきちんとわかれば、フォスターさんみたいなグローバルな学者とも対等に話ができるはずなんです。

——堤さんは、異文化を理解していくうえで、人文学の可能性はどのようなところにあるとお考えでしょうか。

たとえば民俗学者や歴史学者、文学者が同じ研究をするとだ

も金儲けではないですよ。教育も産業だけモノを売っているのではなくて、内面的なもの、お金の換算できない付加価値を重要視しているわけですから。それが何なのかをきちっと定義しないと非常に薄っぺらいものになってしまいます。内容の検証なくしてグローバル化といっても意味がわかりませんから。その内容も他人を理解しよう、異文化を大切にしましょうというだけでは当たり前のことすぎる。そんな当たり前のことをわざわざグローバル化なんて言う必要もないですよ。みんな仲良くみたいな物言いと精華の主張する「友愛」は意味するところがあまりに違います。

——人文学部では、どのようなグローバル人材を育てていくべきだとお考えでしょうか。

やはりグローバル化ということとを考えると、いかに人間としてより豊かに生きていくべきかを考えなくてはならないわけです。勢力の弱いもの、小さいものは淘汰されるべきだといった科学もどきの考え方は、人間が人間である理由がなくなってしまう。

たとえば国際社会に出るために英語が話せたほうがいいというのは理解できるけれども、そ

たいケンカになるのだけど、それが良いとか悪いではなくて、まずそれぞれの立場を知ることがグローバル化だと思います。むしろ、いろいろな立場から出た事実を均等に並べて見た時に、一体何が見えるのか。そういう異文化理解をしなければならぬ。いのではないのでしょうか。その際、総合的のものを見る目というのが絶対求められるわけです。「国際主義」ならぬ「学際主義」。これこそが人文学部の理念なんです。学問の垣根をとってみたら何が見えてくるのか、そこに本質的なものがあるのではないか。人文学の基礎はそこに辿り着くのです。だから異文化理解をする時には、決めつけずいろいろな角度から見ないといけないですよ。この人はこうだとか、この国はこうだって決めつけるのは、一面は正しいかもしれないけれど、それが全部ではないですから。

要するにひとつの視点でこれが正しいという結論なんて出るわけがないんだから、多角的・多角的なものを見る「幅」をもった人を育てないといけないと思っています。

れ以外の言語は地方語で劣っているというような優劣で物事を考えるグローバル化というのは非常に危険だと思います。だったら全部アメリカにしてみましたばいいじゃないか、という極端な結論になってしまいますから。言葉はそこに暮らす人々の歴史そのものです。単なる伝達の道具ではありません。ましてや優劣、利便を論ずる対象であるはずがない。多様であり、違うことを認め合うところに人間が人間である理由があるわけです。そう考えてみた場合、もうひとつ重要なのは、「自分」を自分たらしめている足元の文化をちゃんと言葉にできるか、「私」と私を成り立たせている「内なる異文化」にこだわる心を養ってきただか、という点です。お前は誰なんだと聞かれた時に「自分はこういう背景を背負った人間です」と説明できないと、強いののが勝つだけのグローバル化に飲み込まれてしまいます。それなのに、今ほとんどの人が自分のルーツや文化に無頓着でちゃんと答えられません。だからこそまずは、自分のなかにある知らないことを知らないままにしておいてはいけません。大学は、人文学部が提供すべき価値はそんなところにあるのではないのでしょうか。

——日本の妖怪研究は海外でも行われているのでしょうか。

いまアメリカやヨーロッパでも妖怪研究が盛んですよ。一方、東ヨーロッパの国では、政治的背景でなかなか研究が進んでいませんでした。でも東ヨーロッパには、近代以前の民族的なものが色濃く残っているから、それと日本の妖怪研究を合体させたら非常におもしろい研究になるかもしれないですね。アジアの妖怪研究はというと、進んでいるようで実はあまりされていません。東南アジア、とくに中国・朝鮮半島には日本の妖怪のものと重なっているものが山のようにあるのだけど、いわゆる民俗学の対象が生活史に重点を置きすぎたために、いまだに研究対象になっていないのです。

——そういえば、おもしろい話があつて。マイケル・デイルン・フォスターさんというインディアナ大

堤 邦彦

人文学部教員。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了(文学博士)。説話・伝承学会所属。説話伝承史を専門分野としている。口承文芸や説話の世界など、文字が生まれる前の「言葉を音声として発音する文学」を研究テーマとしつつ、世の中の役に立たないと見なされてきた怪談研究をライフワークとする。その範囲は日本だけに留まらず、世界へと広がり、国内外においてフィールドワークを精力的に行う。近著『異界百夜語り』では、国文学、民俗学、歴史学などの研究者たちが記した怪談奇談の背景にある時代の精神と文化の真相を探っている。

著書

- 『異界百夜語り』/三弥井書店
- 『遊楽と信仰の文化学』/森話社
- 『現代語で読む「江戸怪談」傑作選』/祥伝社
- 『江戸の高僧伝説』/三弥井書店
- 『番町血屋敷(よみがえる講談の世界)』/国書刊行会
- 『女人蛇体 一偏愛の江戸怪談史』/角川学芸出版
- 『江戸の怪異譚 一地下水脈の系譜』/ベリかん社など





特集02 Talk with SATOW Morihiko × YASUDA Masahiro

佐藤守弘 × 安田昌弘 越境する京都カルチャー

千二百年の古都の伝統と若者たちが生み出したサブカルチャーが共存する京都。1968年に開学した京都精華大学も街と深く関わり、文化の成立と発展に大きな役割を果たしてきた。盛んに「グローバル教育」が叫ばれる今、この街、この大学で何を学ぶべきだろう。精華開学と同時代に生まれ、写真やアート、ポップミュージックなどのサブカルチャーを研究してきた佐藤守弘（デザイン学部長）と安田昌弘（ポピュラーカルチャー学部教員）。長く海外でも研究を行ってきた二人が、京都カルチャーの歴史と、その底流にある「越境する力」を語り合った。

サヨクが生んだカルチャー

「まずは、それぞれの京都体験から聞かせてください。佐藤 僕は京都で生まれ育ち、中学の頃からひとりで街へ出るようになりまして。1980年代の初め、学生運動の「サヨク」的な空気が色濃く残っていた時代。店も、街で出会うお兄さんたちも、60年代カルチャーを引きずっていた。

フリージャズしか流さない「ZABO」というジャズ喫茶が河原町にあって、荒神口には有名な「しあんくれー」。今もある「ヤマトヤ」「ブルーノート」。あと、「ミン・マシーン」というパンク喫茶があったんです。5席しかない真っ暗な店に大音量でパンクやニューウェイヴが流れ、店の人は黙々と親指ピアノを弾いている（笑）。

安田 それ、すごいね（笑）。そんな店が成立してたの。

佐藤 河原町と木屋町の間「クラブ・モダーン」という日本初のクラブがあって、その常連がEP14を結成したりね。中学生だから行けなかったけど。まあそうやって19歳の浪人時代までを過ごしました。受験勉強はこの「ほんやら洞」の、まさにこの席でやってたんですよ。

安田 え、そうなの？

佐藤 うん、高校時代から。そうすると、この本棚でしょ。社会主義の本、思想や学生運動の本、アートや環境問

題の本。学生運動の周辺から生まれたサブカルチャーが、店や人や街に受け継がれているのを肌で感じるわけです。

「サブカルチャーの都」という京都イメージは、メディアが後から増幅した面もあるけど、やっぱり大学の街だからでしょう。2013年のデータでは京都市の人口147万人のうち学生が14万3千人。つねに人口の1割が流動してるから、古い街なのにガチガチに凝り固まって激んでしまわない。教員とか大学関係者も多いからね。安田さんは40歳過ぎてから京都に住んだわけだけども……。

安田 僕は関西には全然縁がなくて、5年前に41歳で京都に来たんですけど、最初の印象は、直前まで住んでたパリに似てるな、と。古いんだけどサヨク。サイズがちょうど良くて、チャリでだいたい動き回れる。お金はないなりに、自治体がいっぱい街の活動を支援している、とかね。

サブカルチャーでいうと、「拾得」**「磯」**みたいな老舗ライブハウスや、クラブシーンに大きな影響を与えた「メトロ」あたりが今もつづれずにある。これってすごいことで、おかげで文化的な刺激にアクセスしやすい。狭い範囲に雑多なものが混在していて、値段も安い。東京みたいな大都市だと、渋谷、新宿、高円寺……と棲み分けがあって、しかも郊外へ広がっていくから、異質なものが交わりにくいんですよ。

佐藤 その意味ではニューヨークにも似てるよね。ニューヨークって、ストリートが一本変わると人種や文化や言葉が変わる。京都は見た目こそ変わらないけど、通りが一筋違えば仕事や生活文化が異なるでしょう。それを越境していくことでモノの見方が広がるし、古い因習も乗り越えていける。

実験都市、京都の今

——安田さんは町家暮らしということですけども。

安田 そう。冬は寒いし、夏は暑くて死にそうだし、風呂とトイレは外にあるし（笑）。

佐藤 大変やからやめるときと最初に言ったのに（笑）。

安田 でも、小学校単位の行事とか地縁組織というのは、僕にはすごく新鮮だね。今、町会の組長をやってるんですけど……。

佐藤 大学教員はヒマだと思われているから、いろいろやらされるんですよ（笑）。

安田 まあ大変ではあるんですけど、今のうちに核家族化して土地から切り離され、個人の寄って立つ足元も液状化した社会のなかでは、地縁に根差した共同体や人間関係ってやっぱり大事ななと思います。僕の住んでる西陣は高齢化著しいですが、たとえば左京区の出町柳や一乗寺辺りに行けば、商店街や地域の活動に積極的に関わる若

い子たちが結構いて、自分たちで町をつくるという意識が強い。いわゆる左京区ノリ、もあるのかな。

でも、それは単純なノスタルジーじゃなくて、近代化の過程や社会的文脈を踏まえ、いいとこ取りをしながら新しいコミュニティをつくっていくという動きなんです。その点でも、京都は先鋭的な実験都市になっていると思います。

佐藤 若いアーティストに空家などを斡旋して住ませる「HAPS（東山アーティスト・プレイズメント・サービス）」とか、アート方面でもおもしろい動きがあるよね。

都市におけるアートの生態系を考えた時、「生産者（作り手）」と「受容者」のほかに、美術館やギャラリーなどの「媒介者」と、大学のように作り手を育てる「再生産者」が重要なんですけど、そのための新たな「場」が、今の京都には増えています。単なるギャラリーや美術館や本屋ではない複合的な施設。たとえば、僕らもトークショーやイベントで利用する「メディアアシヨップ」「恵文社一乗寺店」、それに「京都芸術センター」はその典型でしょう。精華が関わっている「京都マンガミュージアム」もそのひとつです。複合施設が複数あることで、アート、デザイン、音楽、マンガ、伝統文化、学問や研究など異なる分野が相互に重なり、垣根を越えやすくなっている。安田 音楽でいえば、かつてはライブ

【注釈】

60年代カルチャー

日米安保闘争、ベトナム反戦、大学紛争などの反体制的政治運動と運動する形で、60年代の若者たちは自由と自治を求め、そのメッセージを込めた表現を次々生み出した。フォークやロック、前衛的な映画や舞台芸術、ポップアート、詩やマンガなど、既存の価値観や権威に対抗する文化運動は、カウンターカルチャーやサブカルチャーと呼ばれる潮流をつくっていった。また、これらの文化や行動様式、表現は、直接的な思想・政治運動と区別するため、「左翼」をカナ表記して「サヨク」と表現する場合がある。

ZABO

難解な音楽、壁を飾るアフリカの仮面。今も語り継がれる伝説の名店。

しあんくれー

「二十歳の原点」の高野悦子ら多感な若者が「思案にくれた」店。本来はフランス語で「champ otar（明るい野）」。

ヤマトヤ

70年開店で、五木寛之の小説にも登場。昨年改装された。

ブルーノート

62年開店。現存する京都最古のジャズスポット。夜はライブも。

ミン・マシーン

京都パンク界の先駆者たちが集まった知る人ぞ知る異色の店。

クラブ・モダーン

ニューウェイブテクノの時代を牽引した京都初のナイトクラブ。



安田 昌弘

ポピュラーカルチャー学部 音楽コース
教員。英レスター大学マスコミ研究所
(CMCR) で日仏音楽産業の研究を行い
Ph.D. 取得。現在は関西、とくに京都の音
楽シーンについてフィールドワークやフラン
スにおける日本のポピュラーカルチャー受
容の研究を行っている。



佐藤 守弘

デザイン学部教員。コロンビア大学大学院
修士課程修了。同志社大学大学院博士後
期課程退学。博士(芸術学)。芸術学・写
真史・視覚文化論を研究領域としている。
著書に『トポグラフィの日本近代』(青弓社)
など。2012年、芸術選奨新人賞(評論等
部門)受賞。

ハウスやジャズ喫茶やレコード屋なん
かが媒介者だったわけですけど、ネッ
ト社会がそれらのありようや、街その
ものまで変えてしまった。レコード
やCDの店は全国的に減る一方だし、
大手のショップだと、**POSシステム**
で一律に売上が管理されて、売れない
ものはすぐ店頭から撤去される。店ご
との品揃えの特徴もなくなって、今、
ここ、の意味がどんどん薄れているん
です。

佐藤 河原町通は、この20年で本屋も
かなり減ったしね。ただ、レコード屋
はわりとまだ数あるほうやない？

安田 そうですね。京都はこれまでの
文化的蓄積があるから、まだもちこた
えている。他の大都市はもっと悲惨
です。そういう状況のなかで複合施設
というものが出てきたんだらうと思う

んです。いろんな作品や価値観を提示
するオルタナティブなスペースはやっ
ぱり街に必要だし、受け手も望んでい
ると思うんですよ。

「自由自治2.0」を構築せよ

—そういう京都カルチャーのなかに
精華はどう位置づけられるでしょう
か。

佐藤 精華は作り手を育てる大学であ
ると同時に文化センター、さっきの分
類でいえば「媒介者」の役割を果たし
てきたと思うんですよ。**木野祭**にいろ
んなアーティストを呼んで、たとえ
ば、**じゃがたら**がライブの途中で歌え
なくなつて失踪したとか、伝説になつ
てるわけでしょう。それから、**アセン
ブリーアワー講演会**。思想家の**吉本隆**

安田 その時に掲げた理念をもう一度
思い出して、今に適應する形で活かそ
うということですよ。言ってみれば
「自由自治2.0」みたいな。90年代以降
の20年間で「リベラル」という言葉の
意味自体が変わってきてますからね。
昔は、ほとんどサヨクとイコールでし
たけども、今では「自由」と「自己責
任論」が微妙な綱渡りをしている。

精華流のグローバル化とは

—今、大学教育に関して「グローバ
ル化」ということが盛んに言われます。
「世界市場に適合する教育」みたいな
意味だと、どうも違和感があるのです
が、この言葉をどう捉えていますか。
佐藤 僕はニューヨークに6年、**安田**
さんはパリに13年いて、海外で学ぶこ

との大切さも実感したわけですけど、
物理的に海外へ出ることじやな
くても、国境の越え方、というのは、
いろんな方法があるんですよ。
たとえば、**ダムタイプ**は、京都から
大阪へ、次に東京へ……というステッ
プがなく、最初からニューヨークを
見ていたそうです。それと同じように、
精華にしながら異文化や世界と向き合
うことはできる。岩倉から世界へ、で
いいんじゃないかと(笑)。
安田 大事なのは、越境する力、だと
思うんですよ。京都は一筋違えば文
化が違うという話がさつき出ましたけ
ど、そういうところへ飛び込んでいけ
る学生がいっぱい出てくれば楽しい。
で、そこから異なるものへの理解やま
なざしをどう身に付けるか。
京都って、たくさん目の目が外から注

明にチョムスキー、美術家の**クリスト**
といった、かなりすごい顔ぶれが講演
しに来ている。

安田 大学が主体のアセンブリーア
ワーにせよ、学生が主体になる**木野祭**
にせよ、いろんなことを仕掛けていく
姿勢は、今後も引き継いでほしいと思
います。

あと最近だと、**ホームカミングス**や
ターニングテーブル・フィルムズ、**空中ルー
プ**みたいな精華出身の人気バンドがい
くつかあります。前二者は、セカンド
ロイヤルレコーズという、京都のイン
ディーレーベルから出てきて、ホーム
カミングスには僕のゼミの卒業生もい
て、全国レベルで人気がある。がんばっ
て欲しいですね。

佐藤 そういえば、このほんやら洞
だつて元学長の**中尾ハジメ**さんたちが
関わっていたわけだし、精華が京都に
与えた影響はいろいろあるよね。一方
で、京都という大学とサブカルチャー
の街だったからこそ、精華は生きてこ
られた。「あんなオモロイ大学もあつ
てええんちゃうか」って(笑)。

ただ、1968年の創立から46年
経ち、学生数も当時の200人から
15倍以上になって、自由自治の建学理
念をみんなが共有するのが難しくなつ
てきたのも事実。創立当初を知る教員
もほぼいなくなつて、精華の、精華ら
しさ、を守るには今が正念場やと思う
んですよ。それは単純に68年に戻らう
という話じゃなくて……。

がれているのがおもしろいし、実際に
外国人だつて多い。それこそ、精華の
キャンパスにもかなりいろんな国の留
学生がいますから。

佐藤 一般に思われている以上に多種
多様ですよ。僕が博士論文を指導し
ただけでも、アメリカ、カナダ、中国
や韓国はもちろん、サウジアラビア、
ベネズエラ、ジャマイカ、ラトビア
……。「なんで京都に来たの？」って思
わず聞きたくなる場所からも(笑)。身
近なキャンパスでも国境を越えていく、
トランスナショナルな感覚を学べる。
文化って、相互に影響し合い、混じ
り合い、現地に適合した形に変容しな
がら、雑種性を獲得していくのがおもしろい。学生には、そんないびつな形
の文化のおもしろさを少しでもわかっ
てもらいたいと思いますね。

EPI4
1980年結成。伝説のエレクトロ・
ファンク・バンド。

ほんやら洞
音楽、アート、詩などの表現や反戦運
動の拠点となった喫茶店。

拾得と磔磔
拾得は73年、磔磔は74年開店。ともに
酒蔵を改装した空間で、関西フオーク
やブルース、90年代のくるりまで数々
の名演が生まれた。

メトロ
90年開店。京都のクラブカルチャーを
牽引してきたライブハウス。

HAPS
アーティストの住居探しや作品制作の
仲介支援を行う団体。

メディアショップ
現代美術、デザイン、建築等の書籍を
扱う書店。ギャラリーを併設。

恵文社一乗書店
全国のアートカルチャー好きが集まる
左京区の名物書店。

京都芸術センター
廃校になった小学校を再活用し、芸術
の振興を目的とした施設。

POSシステム
アメリカのスーパーからはじまった売
上の集計・管理システム。

木野祭
精華名物の学園祭。とくにライブは
「フェスレベル」と評価が高い。

じゃがたら
79年結成。江戸アケテミを中心とした
ロック・ファンクバンド。

アセンブリーアワー講演会
68年から続く一般公開の講演会。あら
ゆる分野の一流ゲストを招く。

吉本隆明
『共同幻想論』などで若者に圧倒的影
響を与えた戦後思想の巨人。

チョムスキー
アメリカの思想家。9・11テロに報復
した自国政府を徹底批判した。

クリスト
建物から自然環境までを「包む」作品
で知られる現代美術家。

ホームカミングス
精華出身の4ピースバンド。「FUJI
BOOK FESTIVAL '13」等に出演。

ターニングテーブル・フィルムズ
精華出身の3人組バンド。くるりとの
共同イベントや全国ツアーも。

空中ループ
精華出身の4ピースバンド。配信
限定シングルがFM802「OSAKAN
HOT100」にチャートイン。

中尾ハジメ
学長・理事長を歴任。環境社会学の観
点で早くから原発問題を論じた。

ダムタイプ
京都市立芸術大学出身者を中心とした
映像、ダンス、演劇などを組み合わせ
たアート・プロジェクト。

01 養老孟司氏と内田樹氏が人文

学部客員教授に就任決定

2015年4月にカリキュラムを一新する人文学部。新たなスタートを切るにあたり、日本を代表する養老孟司氏と内田樹氏の2名が客員教授に就任することが決定した。就任予定年月日は2015年4月1日で、学生たちに対し年数回の特別講義を担当する。

養老氏は、解剖学者として東京大学医学部などで長年活躍。著書も多く、「からだの見方」（筑摩書房）で1989年にサントリー学芸賞を受賞、2003年出版の『バカの壁』（新潮社）は同年のベストセラー1位となり、毎日出版文化賞特別賞を受賞している。専門分野である解剖学だけでなく、哲学や思想、社会学、マンガやテレビゲームにも造詣が深く、解剖学を中心とした多角的な視点で人間や現代社会への探求を続けてきた。他にはない研究者、識者といえる。そのような養老氏の独自の視点が本学学生にとって大きな影響を与えることを期待し、客員教授への就任に至った。

内田氏は、神戸女学院大学名誉教授であり、哲学研究者、思想家、倫理学者、武道家など幅広い分野で活躍。専門はフランス現代思想で、なかでもフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス著書の翻訳、研究を重ねてきた。レヴィナスを基点とするユダヤ人問題

をテーマとした『私家版・ユダヤ文化論』（文藝春秋）で第6回小林秀雄賞を受賞、『日本辺境論』（新潮社）では2010年新書大賞を受賞するなど、著書も多数。その他、映画、武道論など著作のテーマは広く、現代社会にかかわる問題全般を対象としている。

教育問題に対しても独自の考えを有し、高等教育の役割を学生自身の知性の活性化にあるとし、そのための欲動・姿勢をもたらすものでなければならぬと語っている。このような考えをもつ内田氏から、本学学生への直接的な働きかけによる教育効果が期待される。

両氏による就任にあつてのコメントは以下の通り。

養老孟司

「自分で考えるとはどういうことか、その方法を若い人たちに伝えられたいいなあ、と思っています」

内田樹

「みなさん、こんにちは。内田樹です。このたび京都精華大学の人文学部にお招き頂き、研究教育のお手伝いをする事になりました。前任校（神戸女学院大学）を早期退職したときに、もう大学では教えないつもりでした。でも、竹宮学長とマンガについての対談本を作る過程で、この大学の教育理念と仕組みの風通しを知って感銘を受け、「こういう自由な大学が存在することが日本の未来にとって必要」と痛感して、ついそう申し上げたら、勢いで客員教

03 京都精華大学のLINE@アカ

ウン트가オープン

「LINE@に京都精華大学のアカウン트가オープンした。入試関連情報やオープンキャンパスの情報のほか、高校生・受験生に役立つ情報を配信していく。」

「LINEアプリから、友だち追加↓□検索↓@koseikaで検索し、追加することで閲覧可能。」

04 京都精華大学 創立45周年記念

事業「ダライ・ラマ14世×よ

しもとばなな講演会」での対談を収録した『小さなじわるを消すだけで』が出版

ダライ・ラマ14世とよしもとばなな氏の対談を収録した『小さなじわるを消すだけで』（幻冬舎）が2014年10月23日に出版された。本作品には、京都精華大学創立45周年記念事業のひとつとして2013年11月24日（日）にダライ・ラマ14世とよしもとばなな氏を迎え開催された講演会における講演や対談などが収録されている。

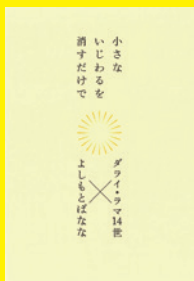
講演会では、本学の教学内容である芸術、文化が人間社会に与える影響や可能性を探る場として「世界を自由にするための方法―宗教家と芸術家の視点から」と題し、ダライ・ラマ14世は宗教家としての立場から、作家のよ

05 教員の活躍

著作をはじめ、展覧会、作品発表など、京都精華大学の教員の活躍を紹介する。

学長の竹宮恵子が2014年度秋の褒章で「紫綬褒章」を受章

2014年度秋の褒章で、学長の竹宮恵子（マンガ学部教員）が「紫綬褒章」を受章した。紫綬褒章は「学術、芸術上の発明、改良、創作に関して事績の著しい者」に対して授与されるもので、竹宮はマンガ家として優れた作品を数多く発表するとともに、複製原画の開発や機能マンガを通じて、マンガの新たな可能性を追求するなど、芸術文化の発展に大きく貢献したことを評価されて受章に至った。



しもと氏は表現者の観点から、人間、生と表現の関係性などについて語られた。

授を拜命することになりました。ときどき大学に登場します。どうぞよろしくお願い致します」



養老孟司

内田樹

02 2014年度秋期 新任教職員

◎デザイン学部

川嶋賢介
(建築コース)

◎事務局

井上 昴美
(教務課)植松あおば
(学生課)中出 祥二
(教務課)

竹宮恵子

◎著作（2014年8月〜10月発行）

『NHKスペシャル 故宮―流転の名品を知る 美を見極める』

石川九楊（ビジュアルデザイン学科教員／書家）ほか／NHK出版

台北・故宮収蔵の中国歴代皇帝コレクションから古代の青銅器、宋代の書画、稀少な青磁などの国宝級の文物の数々を、制作における技術や歴史をひもときながら紹介した冊子。

『みんなの太陽の塔』

タナカカツキ（デザイン学部客員教員／マンガ家）／小学館

千里の丘にそびえ立つ、高さ70mの太陽の塔。その太陽の塔がわれわれと一緒に日常生活を送っていたら？という考えをもとに描かれた絵本。

『ムシユク』1巻

都留泰作（ストーリーマンガコース教員／マンガ家）／小学館

昆虫学者を夢見ていた主人公が夢破れ失意のなか、実家のある日本最南端の島・与那瀬へと戻ることからはじまるストーリー。マンガ家であり文化人

類学者でもある都留泰作が描き出す独特な世界観の作品。

『平和をわれらに!』

中野晴行 監修(マンガ学部客員教員/編集者) / 小学館

終戦記念日を機に、マンガで平和への祈りを描き続けた国民的マンガ家である水木しげる氏、手塚治虫氏、藤子・F・不二雄氏、石ノ森章太郎氏がそれぞれの作風で、平和への願いを描いた作品を1冊にまとめ、編集した作品集。

『海月姫』14巻

『海月姫外伝 BARAKURA』薔薇のある暮らし』2巻

『東京タラレバ娘』1巻

東村アキコ(マンガ学部客員教員/マンガ家) / 講談社

『海月姫』は「おしゃれ」に縁のなかった少女と女装男子が繰り広げる騒動を描いたコメディ作品。第34回講談社漫画賞少女部門や、「このマンガがすごい! 2011」オンナ編第3位を受賞している。『海月姫外伝 BARAKURA』薔薇のある暮らし』は、『海月姫』のスピノフ作品で、韓流スターにハマってしまった主婦達がコミカルに描かれた作品。『東京タラレバ娘』は、東京で働くアラサー女子が主人公。アラサー女子の葛藤や思いが東村アキコならではの鋭い視点で描かれている。

『イチン再見!』3巻

村上もとか(マンガ学部客員教員/マンガ家) / 小学館

日本にまだ女性のマンガ家がいなかった時代に「女流マンガ家」という道を拓いた、1917年生まれのマンガ家・上田としこが主人公の物語。『第42回日本漫画家協会賞』優秀賞を受賞した作品。

◎ライブ

『高野寛 アコースティックツアー ブラジルから遠く離れて』〜25th Anniversary 2nd season〜

高野寛(音楽コース教員/ミュージシャン)

【日時】12月21日(日)

【場所】全国約20カ所

『スチャダラパー』層の上でもディセンバー』

Bose(音楽コース教員/ミュージシャン)

【日時】12月13日(土)

【場所】LIQDROOM(東京・渋谷区)

◎展覧会・その他

『建築の皮膚と体温』イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界』会場デザイン

鈴野浩一(プロダクトデザイン学科客員教員/トラフ建築設計事務所共同

サスレディオギャング』出版/集英社

大島千春さん(マンガ学部ストーリーマンガコース卒業生)

著書『いぶり暮らし』1巻出版/徳間書店

金城宗幸さん(マンガ学部マンガプロデュースコース卒業生)

原作『神さまの言うとおり』8巻出版/講談社

かねもりあやみ(ペンネーム)さん(芸術学部ストーリーマンガ専門分野卒業生)

著書『この街は神さまの庭』四神の京都・町家暮らし』1巻出版/秋田書店

河上大志郎さん(マンガ学部ストーリーマンガコース卒業生)

著作『オトノバ』が『週刊ヤングマガジン』連載開始/講談社

熊谷祐樹さん(マンガ学部ストーリーマンガコース卒業生)

著書『終末風紀委員会』2巻出版/小学館

作元健司さん(マンガ学部マンガプロデュースコース卒業生)

原作『天啓のアリマリア』1巻出版/講談社

主宰)

ミラノを拠点に幅広い分野で活躍した建築家、デザイナー、画家として編集者であるジオ・ポンティがデザインしたタイトルが再現され、「イタリアモダンデザインの父」の建築表現を体感することができる展覧会。鈴野浩一は「外壁」「内壁」「床」「窓」の4つのテーマを柱に、「軽さ」や「温もり」の空間が表現された会場デザインを担当した。

総合マンガ誌キッチュ第六号発売記念イベント第一弾「がちマンガトーク・漫画家は職業ではない、生き方である!」

ひさうちみちお(ギャグマンガコース教員/マンガ家)、阿部洋一(ストーリーマンガコース卒業)ほか

【日時】12月20日(土)

【場所】ロフトプラスワン・ウエスト(大阪・中央区)

杉井ギサブロー、石田祐康さんの作品が「文化庁メディア芸術祭十勝帯展」にて上映

文化庁、国立新美術館による文化庁メディア芸術祭実行委員会が主宰しているアートとエンターテインメントの祭典「文化庁メディア芸術祭」。10月に行われた十勝帯展にてアニメーションコース教員の杉井

助野嘉昭さん(芸術学部ストーリーマンガ専門分野卒業生)

著書『双星の陰陽師』3巻出版/集英社

常深アオサ(ペンネーム)さん(マンガ学部ストーリーマンガコース卒業生)

著作『狂騒ファミリア』が「月刊少年エース」連載開始/角川書店

萩原天晴さん(マンガ学部マンガプロデュースコース卒業生)

原作『平成甘味録さぼりマン』が『モーニング』連載開始/講談社

◎人文(2014年8月〜10月)

エルノフィアンティ・ニネさん(人文学部卒業生)

原作『ラー・ターザン』の映画が「インドネシア映画祭2014」で上映

高谷昂佑さん(人文学部卒業生) 監督・脚本「オシャレ番外地」が「RANDANCE FILM FESTIVAL(イギリス・ロンドン)」 「CAMERA JAPAN 2014(オランダ・ロッテルダム)」 「FABERDEEN'S INTERNATIONAL FILM FESTIVAL(イギリス・アバディーン)」にて上映

06

卒業生の活躍

ギサブローの作品「グスコープドリの伝記」と、アニメーションコース卒業生の石田祐康さんが自身の卒業制作としてつくった「rain town」が上映され、好評を博した。

著作をはじめ、受賞、作品発表・連載など、京都精華大学の卒業生の活躍を紹介する。

◎芸術(2014年8月〜10月)

木血泉さん(短期大学美術科染織コース卒業生)

著書『昨夜のカレー、明日のパン』(河出書房新社)がNHKBSプレミアAMでテレビドラマ化

古松嘉也さん(芸術学部映像コース卒業生)

岡崎ときあかり2014プロジェクト ション・マッピングングコンペティション」最優秀賞受賞

舟田潤子さん(芸術学部版画専門分野卒業生)

10月26日(日)、河原町三条に新しくオープンしたデザイナーズホテル「ホテルグラン・エムズ京都」のアートワークを担当



『オシャレ番外地』 ©VIPO

ハヤシコウスケさん(人文学部卒業生) 所属バンドのシナリオアートが『Tokyomeiancholy』トウキョウメランコリー』(キューンミュージック)をリリース

福島由子さん(人文学部卒業生) 写真展示イベント「御苗場 vol.15 関西スポンサー賞受賞

ミロコマチコさん(人文学部卒業生) 著書『ぼくのふとはうみでできています』(あかね書房)が「第63回小学館児童出版文化賞」受賞



個人住宅 [SHIRASU]

◎マンガ(2014年8月〜10月)

石川チカ(ペンネーム)さん(芸術学部ストーリーマンガ専門分野卒業生) 著書『交番PB』1巻、『石川チカ作品集イチカバチカ』出版/幻冬舎

榎屋克優さん(マンガ学部ストーリーマンガコース卒業生)

著書『日々ロック BOOTLEG』 『テキ

京都精華大学の在学生の活躍を紹介する。

ストーリーマンガコース4年生が「第65回ちばてつや賞 一般部門」で激励賞受賞

ストーリーマンガコース4年生の透村(ペンネーム)さんの作品『はなぢの思い』が「第65回ちばてつや賞 一般部門」において、奨励賞を受賞した。この作品は「話の作り方や人間を見る目、線の一本一本からあたたかいかいものを感じ、読者から好かれる作品を描けている」と審査員のちば先生より高評価を受けた。

大学院マンガ研究科生の作品が『ジャンプSQ・19』に掲載

大学院マンガ研究科博士前期課程2年の柘木あらた(ペンネーム)さんの作品『アンティーク・アニメ』が8月発売の『ジャンプSQ・19』(集英社)に掲載された。柘木さんは過去に同誌で複数の作品を発表しており、今後も活躍が期待されている。

映像コース3年生が「岡崎とさあかりプロジェクト」

マッピングコンペティション」で企業協賛賞受賞

未来のアートまちづくりを見据え、映像を学ぶ学生やクリエイターからプロジェクトチーム「マッピングコンペティション」を募集するコンペティション「岡崎とさあかりプロジェクト」において、映像コース3年生の島村彰さんと奈須翔太さんのグループ作品「Transitional age」が企業協賛賞を受賞した。

映像コース4年生のプロジェクトチーム「マッピングコンペティション」で、映像コース4年生の田村聡太さん、谷雄介さん、アイヴァン・リーさんのグループによるプロジェクト「マッピングコンペティション」の壁に映像が投影された。

日本とフランスの現代アートを楽しめるイベント「ニュー・ブランシュKYOTO」で映像コース4年生の田村聡太さん、谷雄介さん、アイヴァン・リーさんのグループによるプロジェクト「マッピングコンペティション」の壁に映像が投影された。

立体造形コース4年生の作品が「第26回UBEビエンナーレ(現代日本彫刻展)」にて実物制作指定作品に選出

立体造形コース4年生の竹腰耕平さんの作品が「第26回UBEビエンナーレ(現代日本彫刻展)」において、実物制作指定作品に選出された。2015年秋開催の本展に野外彫刻作品として出品される予定となっている。

ストーリーマンガコース3年生の作品が『別冊マーガレットsister』に掲載

マンガ学部ストーリーマンガコース3年生山本まこと(ペンネーム)さんの作品「番犬もこの恋」が、10月に発売された『別冊マーガレットsister』の秋号(集英社)に掲載。好評を集めた。

デザイン学部の学生が「TOKYO DESIGNERS WEEK 2014」に出展

デザイン学部のビジュアルデザイン学科、プロダクトデザイン学科、建築学科S学生が、TOKYO DESIGNERS WEEK 2014においてクリエイターの卵たちが競う学校作品展「ASIA AWARDS」に出展した。世界各国から約50校が参加し、「MY AVANT-GARDE」をテーマに作品を競い合った。全参加校によるプレゼンテーションにおいて、プロダクトデザイン学科

の学生が2位に入賞するなど好評を得た。



「セイカビジュアル未来プロジェクト」ビジュアルデザイン学科
デジタルコミュニケーションを使った未来の京都観光を提案



「み」プロダクトデザイン学科
“見る”ことや“見えている”ことの意味を考え直す作品を制作



「新感覚」建築学科
体験する人間の感覚を研ぎ澄ませる空間をデザイン

「FIT」堀田実来 (2013年度 陶芸コース卒業制作)

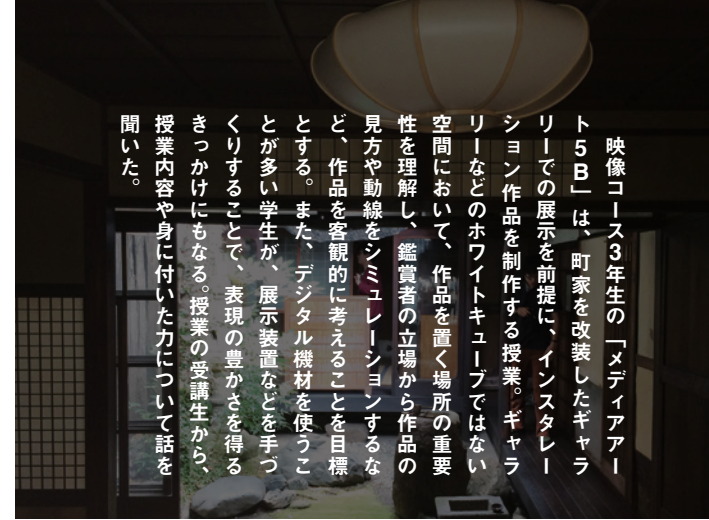


在学生による授業紹介 Class Introduction
教員によるレポート Report
イベント紹介 Event



在学生による授業紹介

身に付けた力を社会で試す授業を紹介する。



映像コース3年生の「メディアアート5B」は、町家を改装したギャラリーでの展示を前提に、インスタレーション作品を制作する授業。ギャラリーなどのホワイトキューブではない空間において、作品を置く場所の重要性を理解し、鑑賞者の立場から作品の見方や動線をシミュレーションするなど、作品を客観的に考えることを目標とする。また、デジタル機材を使うことが多い学生が、展示装置などをつくり出すことで、表現の豊かさを得るきっかけにもなる。授業の受講生から、授業内容や身に付いた力について話を聞いた。

第3回 芸術学部映像コース「メディアアート5B」

町家を使った映像インスタレーション展

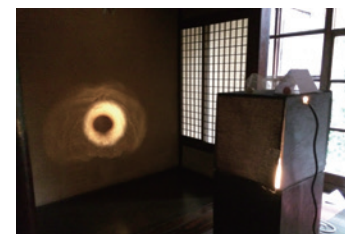
映像制作の基礎を学んできた私たちがインスタレーション形式で作品を制作し、さらに学外の町家を舞台に展示するというこの授業。はじめてのことばかりで、正直なところ、右も左もわからない状況からのスタートでした。まず、実際に展示を行う町家に足を運び、空間のイメージをクラスの各自で言語化することからはじめました。そこから、みんなで意見を交わし、展示会のコンセプトを話し合います。町家特有の構造や日本家屋のもつ陰影の濃さから「風」「怖い」といった十人十色のイメージが飛び交うなかで導き出したテーマが「光と気配」でした。次に、作品を町家のどこに展示する

のかを考えます。私が目を留めたのは床の間。以前、華道を習っていたこともあって、床の間には美しいものを飾るといった感覚があったんです。自分にとって「本当にきれいなものは何だろう」と考え、私の根底に潜む美意識、他者に影響を受けていない純粋に、きれいなものを、床の間に投影しようと思いました。自分のなかにある、きれいなものをどう表現するか。自身と向き合うなかでピンときた素材がホオズキ、それも表皮を落として網状の繊維を残した。網ホオズキ、でした。床の間というひとときわ暗いスペースを活かすため

に、手づくりの幻灯機を制作し、繊細で淡い網ホオズキの像を投影するという作品を思いついたのです。幻灯機は虫めがねをレンズ代わりに使ったごく簡単な仕組みなのですが、プロジェクターでは表現できない、きめ細かな像を投影できます。私はその装置自体のシンプルな構造がおもしろく、作品の一部として展示しようと考えました。しかし、担当教員の呉先生からは「装置を見せずに、像だけを作品として見せた方がいい」とアドバイスを受けました。そこではじめて、見る側にどこまで作品を見せるのかを考え、あえて見せないという選択肢の重要性に気付かされたのです。

また展示中も、想定外のことがたくさん起こりました。たとえば、町家という風通しの良さゆえにホオズキが飛ばされてしまったり、空間の暗さから作品の解説文が見えづらかったり……作品にこめた思いを「伝える」以前に、ちゃんと「伝わる」作品や空間になっているのか、という問題とぶつかったのです。自分が見る側の立場になっ

ていなかたんだと痛感しました。場が作品にどう影響を及ぼすのか、あるいは作品がその場にどのように関わるのか。見る側の視点に一步近づくことで、作り手としての視野を広げることができたように思います。



床の間に投影された網ホオズキの像と幻灯機。町家の中に流れる風を受けて、像が揺れる仕組みだ。床の間に映った像は、ホオズキの繊維までくっきりと浮かび上がりながらも、おぼろげな印象を与えている。



幻灯機は木箱の中に網ホオズキを入れ、背後からLEDライトを投射している。複数の虫めがねを通して実物より大きい像が映る。「理科の授業で習った実像・虚像を思い出して中学校の教科書を読み返しました」。

教員によるレポート

津堅信之
アニメーション史研究家／マンガ学部アニメーション学科教員



開会式

今年8月、アニメーション専門の国際映画祭として広く知られ、国内外の多くのアニメーション作家が参加する広島国際アニメーションフェスティバルが開催された。新作の公開審査が行われるコンペティション部門には、74の国と地域から過去最多の2217本（日本からは289本）の応募があった。学生作品も多く、広島フェスは、いわば新人作家の登竜門なのだが、事前の一次選考の結果、フェスの本選に残ったのは、わずか59本だった。そこからグランプリなどの受賞作が決まるのだが、出品総数との比較で考えると、本選に入るだけでも大変なことだとわかる。本学アニメーション学科からも何作か応募したが、残念ながら本選には入らなかった。それどころか、289本もの応募がありながら、日本作品は1本も本選に入らなかったのである。これは広島フェスの歴史の中でも初めてのことだ。

ひとつくちにアニメーションと言っても幅広く、テレビアニメや劇場用アニメ以外にも、「短編アニメーション」という分野がある。これは、多くの場合個人に近い立場で、風刺を込めたり、映像の美的可能性を追求したり、もっとばらアートに近い形で制作される。広島フェスのコンペ出品作の多くは、こ

グローバルなアニメーション教育とは何か？

——第15回広島国際アニメーションフェスティバルに参加して——

の短編アニメーションである。日本のアニメーションは、短編アニメーションの分野を含めて国際的に評価されており、今大会でなぜ日本作品がコンペに残らなかったのかを不可解だった。

一方、アニメーションを学ぶ立場の学生は、どう感じたのだろうか。今大会には、アニメーション学科の学生が20人近く参加したが、多くの学生はテレビアニメ中心に楽しんでいるので、広島フェスで接する作品は、同じアニメーションでも異世界に近い。彼らに感想を問うと、印象に残った作品と居眠りを誘う作品とに分かれたようだが、共通するのは、普段テレビアニメを見る時と同じく、ストーリーに注目する傾向が強いことである。

ストーリーが理解できない」ということで感受性を閉じてしまうべきではない。なぜなら、アニメーションは、言葉がなくても通じ合う、世界共通の言語。映像言語になり得る表現手段だからである。そうした映像言語としてのアニメーションを、目指そうという時、アニメーションで表現できることの多様性に気づき、それを実践してみようという行動力を、早い段階から喚起させることがアニメーション教育には必須なのだということを、私自身、図らずも再認識させられたのが、今年の広島フェスだった。



コンペティションの国際審査委員。最も手前は、日本の山村浩二氏。



津堅信之
1968年兵庫県生まれ。専門領域は日本アニメーション史。近著に『日本のアニメは何がすごいのか』（祥伝社新書）。

イベント紹介

京都精華大学に関するイベントを案内する。一般の方も聴講、参加が可能。

と京都の風土」吉岡幸雄（天然染料染織史家）
第13回 1月8日（木）「京唐紙について」千田聖二（株式会社唐長）など

【場所】京都精華大学 黎明館1階 L101
【申込】不要

【問い合わせ先】京都精華大学 教務課 芸術教育担当 TEL 075-702-5244

●デザイン学部建築学科・連続レクチャーシリーズ可能性の空間

建築学科教員およびゲスト講師が空間をめぐる対談や講演を行う連続レクチャーシリーズ。

【日時】毎回木曜18時〜

12月4日（木）「思想としての衣と身体」COSMIC WONDER / 前田征紀（アーティスト）
12月11日（木）「建築の外へー路上ヴァナキュラー・物質文化」佐藤守弘（京都精華大学教授）
1月8日（木）「人間ー環境系のデザイン」門内輝行（京都大学大学院教授）

【場所】京都精華大学 風光館3階 建築学科フォーラム（F331）

【申込】不要
【問い合わせ先】京都精華大学 デザイン学部 建築学科
E-mail architec@kyoto-seika.ac.jp

●アセンブリーアワー講演会

開学の1968年から行われている公開トークイベント。あらゆるジャンルから一流のゲストを迎える。

森栄喜（写真家）

「親密な、写真」

恋人や友人とのプライベートな日常を記録した写真集『ritmacy』で木村伊兵衛写真賞を受賞した森栄喜さんが、写真のこと、受賞作品のこと、同性婚にまつわる活動のこと、これからのことについて語る。

【日時】12月4日（木）16時20分〜17時50分

渋谷慶一郎 + evala（音楽家）

「音楽に未来はあるか？」

音楽家であるお二人が、いままでの活動、いま考えていること、これからの展望について語る。

【日時】12月11日（木）16時20分〜17時50分

【場所】京都精華大学 友愛館 Agora

【申込】不要

【問い合わせ先】京都精華大学 社会

連携センター TEL 075-702-5343

●石川九楊連続「公開」講座 第6講 「花の構造」ー花と日本人

石川九楊（デザイン学部・デザイン研究科教員）による連続公開講座。

【日時】12月11日（木）花と生活 13時〜14時30分

【場所】京都精華大学 春秋館2階 S201

【申込】不要

【問い合わせ先】京都精華大学 教務課 デザイン教育担当 TEL 075-702-5129

●オープンキャンパス

人文学部・ポピュラーカルチャー学部・マンガ学部の3学部によるオープンキャンパスを開催。入試相談、授業体験、教員による個別相談などを実施。

【日時】12月14日（日）10時〜16時

【場所】京都精華大学

【申込】本学Webサイトより事前申込制

www.kyoto-seika.ac.jp/opencampus/

ご支援くださるみなさまへ ～ご寄付のお願い～

様々な支援に関して、ご寄付のご協力をお願いしております。

「学生奨学金制度への支援」、「学生生活への支援」、「文化振興活動への支援」、「国際交流活動の支援」、「教育・研究設備整備事業への支援」より寄付用途を選んでいただき、みなさまのご意向にかなう運用をしています。お申し込みは、銀行窓口、もしくは、インターネット上でのクレジットカード決済にてご寄付いただけます。この寄付金は、文部科学省から「特定公益増進法人であることの証明書」の交付を受けており、税金控除の優遇措置を受けることができます。詳細につきましては寄付募集 Web サイト、リーフレットをご覧ください。

●寄付募集 Web サイト

www.kyoto-seika.ac.jp/donate

●お問い合わせ

京都精華大学企画室寄付募集担当

TEL: 075-702-5201 / FAX: 075-702-5391 E-mail: kikaku@kyoto-seika.ac.jp

卒業生の方へ

●京都精華大学の情報は Facebook でもお知らせしています。

www.facebook.com/KyotoSeikaUniversity



●「木野通信」送付先住所の変更は、企画室・木野会事務局までご連絡ください。

E-mail: kinokai@kyoto-seika.ac.jp FAX: 075-702-5391



木野通信 第63号

2014年11月20日 発行

京都精華大学 入試広報部 広報課

〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

TEL: 075-702-5197 www.kyoto-seika.ac.jp

京都精華大学 学部・学科・コース

芸術学部

【造形学科】洋画コース／日本画コース／立体造形コース

【素材表現学科】陶芸コース／テキスタイルコース

【メディア造形学科】版画コース／映像コース

デザイン学部

【イラスト学科】イラストコース

【ビジュアルデザイン学科】グラフィックデザインコース／デジタルクリエイションコース

【プロダクトデザイン学科】プロダクトコミュニケーションコース／ライフクリエイションコース

【建築学科】建築コース

マンガ学部

【マンガ学科】カートゥーンコース／ストーリーマンガコース／マンガプロデュースコース／ギャグマンガコース／キャラクターデザインコース

【アニメーション学科】アニメーションコース

ポピュラーカルチャー学部

【ポピュラーカルチャー学科】音楽コース／ファッションコース

人文学部

【総合人文学科】